

令和3年度 第4回小田原市社会教育委員会会議概要

- 1 日 時：令和4年（2022年）2月3日（木）10：00～11：45
- 2 会 場：小田原市生涯学習センター本館 第2会議室
- 3 委 員：木村議長、笹井副議長、有賀委員、金子委員、齊藤委員、高橋委員、平井委員、深野委員、村上委員、山岸委員
- 4 職 員：鈴木文化部長、尾沢文化部副部長、湯浅生涯学習課長、藤澤生涯学習課副課長、八田係長、内田文化財課長、佐次図書館長、澤地スポーツ課長、菊地青少年課長
（事務局）中村生涯学習課副課長、相澤主査

5 傍聴者：なし

6 概 要

1 文化部長挨拶

鈴木文化部長から挨拶をした。

2 報告事項

（1）令和3年度主要な社会教育事業の結果及び予定について

資料1に沿って各所管課長から順次報告をした。

【深野委員】 おだわら市民学校についてだが、参加者が減らずに盛況に進められていると思う。おだわら市民学校のポイントは、OBが市民活動でどのように活躍しているかだと思う。そもそもOBへの支援は、何かされているのか。

【生涯学習課長】 おだわら市民学校については、先日公開講座を開催し、卒業生で実際に活動されている方に話をしていただいた。卒業生には、基本的に公開講座などの御案内はしている。また、何か活動を始めたかについて、問い合わせ等のお付き合いはある。さらに、今週末に卒業生向けの講座を開催する。活動に参加したいが悩んでいるという人たちに、プッシュアップするような講座である。さらに、卒業生ということではないのだが、参加団体の方たちのマインドを形成するための講座を、本日午後、本会議委員の齊藤先生にお願いしており、受け入れる側のマインドを作ってもらような講座を考えている。

いろいろな考えの卒業生がいるので、一律にやるのは難しいが、当面は情報提供と、あとは何か始めたかという問い合わせを行っていかうかと思う。ただ、これを何年くらい続けるのかというところがポイントで、辞め時は見極めないといけないと思っている。

【深野委員】 やはりフォローというのが大切だと思うので、これからも積極的に進

めていただきたいと思います。

【有賀委員】 NO.3 キャンパスおだわら事業の夏休み子どもおもしろ学校についてお聞きする。379名とかなり多くの参加者があったようだが、このコロナ禍でどのように開催したのか。

【生涯学習課長】 こちらは、オリンピックがちょうど始まった時期で、神奈川県が緊急事態宣言の対象になる前日であったが、開催することにした。非常にたくさんの方から応募いただいて、子どもたちのニーズはあったと思う。おかげさまで、参加して感染したという話は一切なかった。第5波の時には、まだ高齢者は危ないが、子どもはそれほどでもないという認識があったほか、成長して来年度は参加できない子ども達もいるので、子どもの関係はできる限り開催したいという思いから、実施した。

【有賀委員】 夏休み中に子どもが気軽に遊べる場が少ないので、開催できたことは良かったと思う。

(2) 令和4年度予算概要について

資料2に沿って、文化部副部長、青少年課長が報告をした。

【深野委員】 NO.13 デジタル図書館事業については、デジタル化の時代の新しい取組で、よいと思う。私も時々、国会図書館のデジタル情報を利用するが、小田原ではそれができなかった。例えば、山崎文庫などは、早くデジタルで見られるようにしてほしいのだが、このデジタル図書館事業の中長期的計画はどうなっているのか。

【図書館長】 来年度からの新規事業ということで、まずは一般的なデジタル図書として、貸出サービスからのスタートとなる。加えて、図書館所蔵の地域資料の中で、デジタル化が図れそうなものをまずはデジタル環境で御覧いただけるようスタートさせていくことになる。

いま深野委員がおっしゃったのは、図書館が持っている貴重資料類、例えば特別収書とか、そういったものをどのように展開するかというお尋ねかと思う。このあたりについては、どのレベルまでのものをデジタル化するか、まだ大枠としても定まっていない。例えば、デジタルで公開するとしても、あまりにも高精細なものはデータとしても重くなってしまうので、そこまでのものを一気にやることは難しい。まずはとっかかりとして、図書館にこういうものがあるのだというものをデジタルで見せ、現物を見たいということであれば図書館に来ていただく。そういう図書館に来るための呼び水になるものを、デジタル図書館の中で順次進めていきたいと考えている。

【深野委員】 私は、貴重本の方に関心がある。これらは、直接手に取って見ることができず、触らないことが原則になっていると思うので、そういうものこそデジタル化し、いつでも見られる状態になっていることが非常に重要

ではないかと思う。山崎文庫などは、満州のことを研究する人は、必ず小田原の図書館に来るというくらい貴重な資料である。そういう資料は、小田原の図書館にたくさんあると思うので、ぜひそういうところも取組んでいただきたいと思う。

3 協議事項

(1) 令和4年度社会教育関係団体への補助金について

資料3 沿って各所管課長から順次説明をした。

質問なし

(2) 今期研究レポート骨子案について

資料4・5に沿って生涯学習課長から説明した。

併せて、次回臨時書面会議を開催したい旨を説明した。

【深野委員】 利用者拡大のための、大きな柱を立てるべきだと思う。一つ目は、子どもや若者が大きな柱になる。その世代というのは、ネットの世代である。今や、学校ですらデジタル学習の時代である。だとすると、Wi-Fi云々というのが、生涯学習センターが担う支援のところだけにしか出てこないというのは、ちょっと時代としては遅れているという印象を持ってしまう。例えば、資料5第4章、2ページ上段に【アイデア】とあるが、ここにもっとWi-Fiの活用、情報ネットワークの活用を打ち出して欲しい。地区公民館が情報ネットワークの拠点の一つになる。お年寄りがそういうのが得意ではないというなら、お年寄り向けの講座を開く。田舎の村でもネット環境が整っているところは、おばあちゃんが野菜の出荷状況等をネットで管理している。そういうアイデアはいくらでも出てくると思うので、地区公民館でネットを引いたら、何ができるのかというのをもう一つの柱として打ち出して欲しい。以前も発言したが、子どもにパソコンを使われてしまい、お母さんが家で仕事ができない、小田原にはどこにもそんなことができる環境がない、小田原に住みたくない、そんな話を聞いた。地区公民館に行けば在宅ワークができるというようなことも、地区公民館利用者拡大の一つのきっかけになるし、家にネット環境がない子が、地区公民館で自習ができるということも、一つのきっかけとなると思う。ぜひそういうものも、柱の一つとして打ち出して欲しいと思う。

【笹井副議長】 三点意見がある。一点目は、構成の仕方についてである。第4章は、運営上の現状と課題と、活動そのものの現状と課題というふうに、分けたほうがわかりやすい。鍵の問題は、管理、運営の問題に入るのだが、それとは別に、活動そのものをどう拡充していくのかという二つの問題があるのではないかと思う。

二点目は、地区公民館と公立の公民館の違いは、やはり自由度ではない

かということである。生涯学習というのは、もともとお堅い学校の勉強だけではなく、高齢者の方の囲碁教室だとか、将棋なども学習、子どもたちがいろいろな遊びをするのも学習である。そういうことができるような、柔軟な形で活動できることが望ましい。各地区公民館の実情と違うかもしれないが、例えば、この曜日はこういうことに使う、また、フリースペースで使うときに、何曜日のここに行けば空いている、人が集まっているというように、時間をやりくりするようなことができればいいなと思う。

三点目は、世代間交流というと大げさだが、地域づくりは横に広がる、人と人とか、団体同士ネットワーク化するというだけでなく、いろいろな世代が縦に繋がる、時間軸で繋がるというように、縦と横ができて一つの地域づくりになっているのではないかということである。せっかくこういう地区公民館があるので、世代間が交流してお互いに理解しあうような形ができればいいなと思っている。地元の高校や中学校と地元の地区公民館が連携協力する仕掛けがあるとよいのではないかと。ヨーロッパには公民館は無いのだが、例えば高校生が一人暮らしの高齢者のために月1回料理を作って、公会堂に持ち寄る。そこに地域の一人暮らしの高齢者が集まって、地元の高校生が作った料理を食べる。人が作ってくれたものは美味しいから、高齢者が美味しいねと伝え、高校生は食べてもらうとうれしいから作って良かったと思う。地元の高校や中学と、地区公民館が連携・協力してそういう仕掛けを作っていくと、自治的な世代間交流ができる。現代は、世代間や人同士の分断とか言われているが、そういうものが少しでも解消できるのではないかと思う。

【木村議長】 自分の地域の地区公民館でも、コロナ禍の前は、敬老会に小学生が来て、歌を歌ったりしたが、この2年間はできていない。できる範囲でやってほしいとは言っているが、なかなかお年寄りを集めたり、子どもを集めて何かやるということについて、企画はするのだが、ほとんど中止になっている。小田原市内の地区公民館はどこもそうだと思うが、結局2年間活動をしていないと、館長が変わると以前のことがほとんどわからなくなる。例えば、夏祭りでも、館長が変わってしまうと、どうしたらいいかわからない。そういうことがあるので、何とか少しずつでもやってもらいたいという気持ちはある。地区公民館側にしてみると、人を集めて、クラスターが発生してしまった場合、それが自分の責任だとなるのが嫌なので、何でもかんでも一切中止にしてしまう。今、我々で研究レポートを作ろうとしているところではあるが、結局、今何か言っても、コロナ禍で人を集められないという話になってくる。これからの、コロナがなくなった時点での考え方ということでいかないと、作ったものを各公民館にぶつけられても、現場はきついと思う。

【金子委員】 皆さんからいろいろアイデアをいただいて、私もメモを取った。ほとんどできていない状態だが、基本的に地区公民館は学習の場、自由に集

う場である。先ほど、Wi-Fi の設置等をやったらいいという話があった。自分のところでも、自治会専用のパソコンを購入しようという話もあった。結局は、自治会の集まりも高齢者が主なので、まあいいかということで、購入を先伸ばしにしてきたのだが、やってみるとそれはいいきっかけになると思う。

学習の場に加えて、子どもの居場所という役割も出てきているが、これが一番難しい。来年度以降に向けて、地区公民館ではこういうことができる、何曜日が空いているということは、この会議が始まってからすぐに子ども会のお母さんたちに投げかけたのだが、なかなか回答がない。昔は、敬老会の日に子どもを呼んだり、おじいちゃん、おばあちゃんに作文を作ったり、掃除なども月に1回やっていたが、いつの間になくなった。子ども会にしても、子どもだけ行かせて掃除させたりはできないので、親が付き添わないといけないということで、なかなか子ども会の参加者もない。子どもの居場所については、私どもの自治会でも、平成30年に組長を含めた役員にアンケートを取った。防災、交通安全・防犯、ゴミ問題、この三つが住民の大きな関心事である。子どもについては、子どもの遊べる広場があったらいいという回答だった。今でも子ども会に居場所について聞くと、それは広場か、それとも公園かという話になる。これまでは、地区公民館として子どもの居場所という認識は無かったが、この会議で、そういう流れができてきている。また、特に世代間、中高生とその下の小学生と縦の関係を築かなければいけないという話もあった。基本的には、まちづくり委員会で決めてもらい、使用する場所が地区公民館であるという流れができれば、いくらでも提供できる。私の立場としては一つ一つ、できることからやっていきたいと思っている。

【有賀委員】 子どもをターゲットとした子育て広場や、子ども食堂には自然と様々な年代が集結して、世代間交流が生まれると感じる。私が関わっている子育て広場にも、お手伝いしてくださる方がいる。また、子ども食堂には食材をくださる方、食事を作ってくくださる方、勉強を教えてくださいくださる先生、遊びを教えてくださいくださる方など、子どもを取り巻く様々な大人が存在する。そう考えると、やはり子どもをターゲットとした活動が地区公民館の活性化につながると思う。

【高橋委員】 調査回答、骨子案について、学ぶことばかりだが、自分の地域には、地区公民館が無いので、地元に戻ってこれを活かせないのが悔しい。地域活動、あるいは子ども会というのが人を育てていって、次世代に引き継がれ、さらに地域活動が活性化していくというように、連続していかなければならないというのが私の持論なのであるが、それがいま途中で途切れている。コロナ禍だから途切れているということではない。世間全体を見ても途切れつつある。そもそも、子ども会が解散してしまっている。極端に言えば、自治会の一部も、単独の自治会ではやれないから、どこかと一緒

でないと言員の成り手が居なくて、やっていけないという話も聞こえてきている。そういう中で、地域活動の拠点として地区公民館があるというのは、うらやましいなと思う。子ども会や、あるいは地域の活動の中で、楽しい思い出を作った子どもたちは、大人になっても頭の隅に地域への還元という気持ちが湧いてくるのではないかと。そうすると、敢えて何か仕掛けを作らなくても、率先して地域活動の中心的な役割を担ってくれるのではないかと考えている。現在、地区公民館の中核を担っているのは、お年寄りである。さらに、自治会費で公民館を運営している中で、フリーに使っていいよというところに発想が及ぶかどうかというのが、一番ネックだと思う。そのネックをどう解消したらいいのか。それには、お年寄り若い年代が交流しながらやっていくのが、一番の解消方法だと思う。

【木村議長】 自分の自治会は青年部を作ろうと言っている。昔は青年団という組織があって、大体若い人達が元気よくやってくれた。なので、青年部か何かを作って、働き盛りの人を集めて、お母さんたちも入れてという話もあり、そうするとうまくつながってくるのかなと思っている。そういうことも考えながら、なんとか地区公民館を有効に使っていかねばいけないなとみんな思っているが、なかなかそこを突破することができない。

【平井委員】 骨子案は当面これでいいと思う。自分の自治会に関して言えば、子ども会、青年会、婦人会、老人会と組織があって、その組織が機能して自治会がまわるのだが、子ども会については、子どもはいても入る人がいない。青年会の若い人は、みんな仕事でいない、お祭りなど特別な行事の時しか顔を出さない。婦人はだんだん高齢化して、老人会の方のメンバーになって活動できない。老人会の方は元気に活動しているのだが、地区公民館の活動というと高齢者がメインになっている。高齢者を動かして公民館活動をどうのこうのというのは、どうかと思っている。先ほどの Wi-Fi の設置やデジタル化等、若い世代が参加しやすい環境を整えることが大事だと思う。

【村上委員】 いろいろお話を伺い、なるほどと思いながら考えていた。Wi-Fi やデジタル化について、私も調査票の回答で意見を出させていただいた。いろいろお話を聞いていると、最終的にネックになるのは、運営のこと、その運営をするためのお金のこと、ということにどうしてもいつてしまうのかなとずっと考えていた。そこが解決しさえすれば、活動はそこから生み出していくことも可能なのかなと思っていた。笹井先生の話をお伺いして、地区の住民が自由に使える部分と、地区外の人でも使用料をとって使えるようにするという二つのアイデアが同居していかないと、結局地区公民館は発展していかないと、つなげていけないのではということを考えていた。Wi-Fi 環境を整えても、それをどう活用していいかわからないという意見も出てきてしまう。例えばそれを貸出したり、得意な方が運営をできるような仕組み作りが、どうしても必要になってくるのでは

と思いつながら話を聞いていた。

【山岸委員】 調査票で、本当に様々な意見が出されていて、これはすごいなと思った。こんなに意見というのは集まるものだなど。しかし、実際の今の状況に照らすと、なかなか難しいところがある。特にお金のことや人のことというのは、解決するのが難しいのだと思う。人のことと言えば、これから働く年齢はどんどん伸びていく。働く人口が少なくなるので、お年寄りになっても働かざるを得ない。だが、それと反対に、ワークライフバランスを取りなさいという現状もある。元気な世代の人たちに、仕事だけでなく、自分のこともやりなさいとなると、個人的なことに偏ってしまいがちである。個人的ではなく、生活する場、地域で何か活動しなさいという方向になってくれるといいのかなと思う。それが一番しやすいのは子どもをターゲットにしたイベントである。子どもがそこで何かするとすると、その親の世代、若い世代もそこに来てくれる。お年寄りが何かするというよりも、子どもをメインにして、そこに若い世代を巻き込んでいく。個人的な活動ではなく、地域活動でワークライフバランスをとってくださという考え方が必要なのではないか。

【齊藤委員】 お話を伺って、やはり小田原には地区公民館が 128 館とたくさんあり、よその人から見ると、うらやましいと思った。まず日常的な取組からすると、子どもを中核とした取組ができるとよい。ただし、日常的な取組は、そう毎日できないから、その取組のメインになる人が誰なのかというところがポイントになる。例えば横浜市だと、主任児童員たちが今日は乳幼児の日とか、今日は子ども食堂の日と定めて、取組んでいる。このように、月に 1 回か 2 回だけ取組を担当するという形でやっていけば、無理なく楽しいことができるのではないかと思った。小田原市では、多古公民館がいま活発に動いていて、何回も意見交換等をさせていただいている。いくつかモデルになる公民館では、地域に、そういうことがおもしろいなと思っている方達がいる、私はこれをやってもいいよとか、餅つきを担当してもいいよとかという人が出てくる。このようなことが、日常的な地域のための地区公民館活動になるのではないか。

もう一つ、非日常的な取組としては、外の人をどう取り込むかという話があった。私は現在、外の人として小田原に関わっている。何度も、学生を連れて小田原に来ている。5月の玉ねぎの収穫期に、学生を連れて収穫に来た。こういうコロナ禍でも楽しい経験をさせていただいた。また、10月から11月にかけては、学生20名を連れて、耕作放棄地のみかん収穫のお手伝いと、モミ撒きのお手伝いに来た。そういう日常的な経験と、と非日常的な経験があるとしたら、子どもや若者というのは、非日常的な経験を求めている。そこに知恵のある地域の住民の方がいらっしゃって、小田原における耕作放棄地の課題や、みかんの扱い方等を朝9時30分に集合して17時までいろいろ教えていただいた。本当だったら、泊まってい

きたいという気持ちがあり、実は今、泊まっていく場所を探している。その候補として、地区公民館を考えている。もちろん、地区公民館は地域の人のためにあるのだが、非日常的な経験で言うと、もし地区公民館が、よそ者を泊めてもよいという、開かれた場所として貸していただけるなら、例えば三泊四日とか四泊五日とか、若者を連れてきて、耕作放棄地のお手伝いや、収穫の大変な時期に一時お手伝いをするなど、そういう仕組み作りをすることができる。実は今、大学で体験型研修を企画する委員長になっていて、1万8千人の学生たちを、どうやって研修に連れていくかという仕組みづくりをしている。その大きなフィールドとして、小田原がある。地区公民館が受け入れてくれるのであれば、学生が金曜日の夜から泊まって、地域のお手伝いをし、日曜日の夜に帰ることができる。そういう形でよそ者が入ってきて、さらにそこで子どもも一緒に何かやるような仕組みについて、何年も前から考えている。語弊があったら申し訳ないが、たぶん地区公民館はよそ者を嫌う傾向にあるのではないかと思われる。そこは地域で力のある人に協力してもらえれば、きっとできるのではないかと思っている。その構想は2024年実施予定で動いている。今年はそのためのプレ授業として、何回も学生を小田原に連れてきて、拠点になりそうな場所を探している。人口減少、高齢化、地域だけでは回らないという現場に、よそ者がさっと来て、さっと帰るという取組が、もし話題になれば、子どもが集まって来たり、おもしろそうだから手伝おうかという中高年の方が少しサポートしてくれるような体制づくりができるのではないかという期待を持っている。そういうことをやりたがっているNPOがたくさんいて、いま手を結んでいる。地元の方の受け入れ体制を整えば、小田原全体として、そのような取組が広がっていくとおもしろそうだなという夢を描いている。後半の話は、全部非日常的経験の話であるが、資料2によると、市としても、来年度、子どもへの非日常型の体験学習事業が計画されている。子どもと若者は大変相性がいいので、こういうところに突破口を見出し、開かれた地区公民館になっていけばよいのではないか。

【深野委員】

みなさんの話を聞いていると、ポイントが二つあるかと思う。一つは、小田原には地区公民館が128館もあるという成功体験が、逆に失敗につながっている、発展につながっていないということ。どういうことかという、自治会の縛り、つまり地区公民館は地域のつながりのためにあるという認識からなかなか抜け出せず、地区公民館の活動がどんどん衰退している。その縛りを開放し、広域化していくことが今後の課題になるのではないか。その手段としてWi-Fiの設置やほかの地区公民館との交流という話が出ていると思うが、地区公民館の広域化、地域を越えた活動というところは、一つのキーワードになるのではないかと感じた。

もう一つは、今の地区公民館は基本的に老老交流の場になっているということである。桜井地区でも男の料理講座をやっていて、お年寄りが参加しているのだが、60歳代のお年寄りが、70、80歳代の男の人に料理を教えるという場になっている。決して、若い子育て世代のお母さんがどうのこうのというのはない。やはり老老交流になっている。一方、子ども会が解散するという話がでていますが、それ以上に老人会がどんどん無くなっている。だから、老老交流のもとになる基盤がもう崩れているというのが実態なのだと思う。だとすると、もう老老交流ではなくて、老若交流をするしかない。今の現役世代では、例えばPTAの父の会のように、男の人が結構社会参加するようになってきている。そういう動きを捉え、何か新しい、サークルのようなものを、地区公民館を中心として地域に作ることを考えていく必要があるのではないかと思う。老老交流から老若交流へのキーマンとしての、30、40歳代の方々の活躍をどうやって引っ張り出してくるかが重要である。それには、やはり子どもがキーになってくるのかなと考える。そこを魅力あるものにしていけば、自ずととお父さん、お母さんもついてくるのではないかと思う。UMECOはすでに予約がいっぱいで、新たに予約をとるのが大変だと聞く。全市から集まりやすいから、みんなUMECOを活用するのだが、それより活動範囲が狭いグループであれば、地区公民館を使えるのではないか。地区公民館を少し広域のサークルの拠点にしてもらう等、そういうことが必要なのではないか。広域化の観点と老若交流の観点、この二つを大事に考えていかないと、この先地区公民館活動は廃れていくと感じた。

【木村議長】

皆さんからいろいろな意見が出た。高橋委員が言ったように、最終的には自治会も運営できなくなって、隣の地区とくっつくというようなことになる。今は国からも、70歳まで働かせようという話が出ています。そうなってくると、今までだったら60歳で定年になって、その後は地域のために活動してくれよという話ができていたのが、全部崩れてしまう。今深野委員が言ったように、お年寄りはお年寄り同士でやろうと言って老人会ができたのだが、老人会も一つ抜け、二つ抜け、子ども会も抜け、ということになってきた。地区公民館がそのあたりを取り持とうとしても、結局、元自治会長が公民館長をしていたりと、どうしても自治会のつながりからの人選になってしまう。新しい人がぼんと入って、公民館の館長をやることはおそらくない。大体、自治会の役をやって、その人に頼もうというやり方だと思う。

地区公民館が128館あっても、使っていないところは本当に使っていない。ただ、公民館費を住民からもらい、たまっているだけ。我々の自治会もタウンセンターいずみのできたので、会議でもなんでもそちらに行ってしまう、地区公民館は使っていない。使っていなくても昔からの、地域で作ったものだからということで、公民館費をもらっている。そうする

と住民から、使ってもいないのに、なんで金を払わなければいけないのかと苦情が来る。地区公民館ができた昔の経緯から話をして、そういうものだということで、今のところは抜ける人もいないので、何とかやっている。地区公民館も、動いているところは動いている、動かないところは全然動かない。完全にバランスが崩れている。この研究レポートを各公民館に渡して参考にしてもらい、コロナが落ち着いてからでいいから、様子を見て、またもう一回何年後か、社会教育委員会議で検証しながらやっていったらいいのかなと思っている。

【有賀委員】 第5章(1)公民館活動の中心となるヒトを育てるという箇所の、現在活動中の人、子育て経験者等が地区公民館活動のサポーターやコーディネーター的役割を担えるとよいというところにつながる話である。先ほど、齊藤委員から横浜市では月2回主任児童委員が中心となって、子どもの居場所づくりを行っているというお話があった。私も、小田原市の子育て広場に主任児童委員として関わっている。そこでは、自分達はサポート役で、若いお母さんたちが中心になって計画を立てて毎回活動をしているが、未就学児が対象であるため、子どもが4歳を過ぎてしまうと、お母さんたちはその時点で自動的に活動終了になってしまう。そういった子育て広場で活動されていたお母さんたちを巻き込んで、子どもの居場所のコーディネーターやサポーターの役割を担ってもらいたいのではないかと思う。

【木村議長】 骨子案についてはここまでとする。先ほど生涯学習課長から提案があった臨時書面会議の開催についてはいかがか。

(全員賛成)

それでは、5月の会議の前に、書面会議でレポートの文章案についてみなさんに一度、御確認いただきたいと思う。本日の会議はここまでとする。その他事務局から何かあるか。

(事務局から、次回書面会議については後日改めて通知する旨連絡)

【木村議長】 それでは、本日の社会教育委員会議はこれを持ちまして閉会とさせていただきます。